「周邊から中國を見る」——復旦大學文史研究院の近五年間における關連研究の概括——

葛　兆　光

「周邊から中國を見る」は、復旦大學文史研究院が二〇〇七年の成立當初から推進してきた研究課題である。その中心となる內容は以下の三つの側面を含んでいる。第一に、東アジア各國の中國に關わる漢文文獻を、中國で整理・出版すると同時に、域外におけるその他の中國に關わる文獻についても注意を拂うこと。第二には、それらの漢文文獻とその他の資料に基づき、中國の歷史と文化について新たな解釋を加えてゆくこと。第三には、中國及びその周邊地域、特に東アジアにおける文化の交錯と相互作用を、グローバルな歷史的背景の中に置いて丁寧に觀察し、そのような文化の交錯と相互作用の結果生み出された新しい文化現象に注目することである。

この研究課題は、二つの鍵となる概念の助けを借りて研究が進められた。一つは「相互認識」であり、各文化區域がどのように「他者」の觀察の眼を借りてお互いを認識・反省し、また「自己」への認識と反省が促されたのかという問題である。もう一つは、「文化的アイデンティティ」であり、アジアの各文化區域の間で、文化面におけるアイデンティティの同一性がいかに形成され、いかに崩壞し、そしていかに再建されたのか、という問題である。

「自己認識」を中心として中國の歷史を整理すると、中國はすでに相當に長い二つの段階を經てきていると言える。第一の段階は、「自己を中心とした想像の時代」と呼ぶことができよう。おおむね傳統中國の時代にあたり、それを特徵づけるのは文化思想の領域での天下觀念と、政治制度における朝貢體制である。第二の段階は「西洋という一つの鏡しかなかった時代」であり、明代中後期、西洋人がしだいに東アジアへ入ってきたのに始まり、一九世紀に東方世界に對して巨大な衝擊を與えた時期を經て、いま現在にまで到っていると言うことができる。西方の衝擊によって、中國人が自國について新たに認識し始めたことは一つの進步ではあったが、そのような新しい認識は、あくまで「西方」を基礎としたもので、しかもそれは單純化された一つの「西方」に過ぎなかった。はたしてその鏡は正確で、また中國を認識する唯一の鏡であるのだろうか。それゆえに、中國は第三の時代に入らなければならない。すなわち「多面鏡の中から自己を認識する時代」である。簡單に言えば、それは周邊すなわち日本・朝鮮・ベトナム・モンゴル・インドなどの角度から中國を見、周邊の各地域の、中國に對する觀察と認識の中から、あらためて歷史の中の中國・文化の中の中國・政治の中の中國について理解することである。

「文化的アイデンティティ」の角度から東アジアの歷史を論じると、次のような狀況が窺える。漢・唐以來、中國は東アジア文化の中心として、かつては周邊諸國に西嶋定生氏の言うところの「漢字」「儒敎」「佛敎」「法律國家」などの重要な文化要素を提供してきたのであり、中古時代〔六朝から唐にかけての時期〕において、東アジアには確かに同じ文化的アイデンティティの基礎が存在していた。だが宋・元以降、新しい國際秩序の出現にともなって、このような文化的アイデンティティの同一性はしだいに崩壞し、特に明・淸時代には、壬辰の亂〔文祿・慶長の役〕と明淸交代によって、華夷變態〔異民族王朝による中華支配〕という歷史的な激變がおこり、各國間の文化は次第に遠ざかってゆくこととなった。これにより、現在東アジアの文化的アイデンティティの同一性を再建することが求められていても、歷史的に生み出されたお互いの政治上の不信と文化上の疎遠感のために、再び歷史に立ち返り、相互の政治的信賴や經濟的な支え合いに加えて、文化的なアイデンティティを再構築する必要があるのである。

中國の周邊地域には中國に關わる大量の歷史資料が保存されており、また絕えず變動してきた中國への觀察と認識の記錄も殘されている。特に明・淸時代、すなわち西洋人が常々「前近代」と呼ぶ時期には、漢・唐の中華文化圈に覆われた周邊諸國の範圍を越えて、更に多くの中國に對する新しい認識が存在していた。そこで、二〇〇七年三月、復旦大學文史研究院（National Institute for Advanced Humanistic Studies, Fudan University）が成立してすぐに「周邊から中國を見る」を課題とする研究がスタートしたのである。今までの五年間で、この研究課題はすでに多くの成果を擧げている。以下では「文獻」「會議」「論著」の三つの側面に分けて、紹介を加えることとしよう。

一　關連文獻の編集と出版：『越南漢文燕行文獻集成（越南所藏編）』と『韓國所藏漢文燕行文獻選編』

越南漢文燕行文獻とは、歷史上ベトナム王朝の公的な使節が中國に派遣されて、あるいは民間の人士が中國へ旅行して著した、關連する漢文での記錄を指す。その主な形式は燕行記〔首都北京への旅行記〕と北使詩文集と使程圖〔使者團の行程を描いた圖〕である。『越南漢文燕行文獻集成（越南所藏編）』は、ベトナムに現存する一卷・一書として獨立した燕行文獻七十九種を收集したもので、文獻の原書を影印し、それぞれの文獻について提要を著すという方法で、一三一四年から一八八四年までの五〇〇年以上の間にわたる中國・ベトナム兩國の交流史を一つの側面から描き出し、同時に興膳宏氏の言われる「異域の眼」を通して、元・明・淸時期の中國の文化と社會狀況を目に見えるかたちで提示したものである。

『越南漢文燕行文獻集成（越南所藏編）』二十五册

ベトナムの陳朝・後黎朝・西山朝・阮朝が中國に派遣した燕行使者〔首都北京への使者〕の著述を收錄する。當時中國にやってきた使臣、馮克寬・阮宗窒・黎貴惇・阮攸・潘輝注・李文馥・阮文超・裴文禩・阮述などの人物は、誰もがベトナムの國內では著名な文官

であり、極めて高い漢文の素養を身につけていたのみならず、中國の歴史と文化にも習熟していた。使者團が首都へ赴く途中で、彼らは熟練した筆遣いで漢文を用いて旅程の日記を著し、交際のための公文書をしたため、漢詩を詠んで各地の風光を描き出し、中國の朝野の士大夫たちと書面・筆談による交流を行った――前期には南京を經由し、後期には湖南を經由した使臣たちは、現地の文人による詩文の會に參加した唱和詩を特に多く殘している――北京に着いた後もやはり漢詩漢文を用いて朝鮮・琉球兩國の使節と互いに唱和と贈答を交わしており、巧みに漢文を用いて交流し合うことに深く誇りを感じていた。これは二〇世紀以前の東アジアにおいて、漢文が早期のヨーロッパにおけるラテン語と同じように、國境を越えた通用語の機能を持ち、東アジアの各文化圏の繋がりと交流の基礎となっていたことをよく表している。

當時ベトナムの使者が中國に來る際には、その大部分は鎭南關（現在の友誼關〔廣西チワン族自治區〕）を通って中國へと入った。廣西と湖北・湖南を經た後、その進行ルートは歴史時期の違いによっておおむね前期・後期の二路線に分かれる。前期は東に折れて長江の流れに沿って下り、南京を經て北上して燕京に赴くルートであり、後期は湖北で長江を渡り、北上して河南で黄河を渡ったのち、河北を經て燕京に至るルートである。その旅程は中國の大半の地域を經由するもので、往復はしばしば二年に及び、時には更に長い時間がかかることさえあった。行程の長さ、經由地の豐富さ、加えて外國人の異國他郷に對する好奇心によって、それらの使者たちが中國國内で著述・製作した中國に關する文章や圖畫は、しばしば中國本土の同時期の記錄よりも更に精緻かつ率直で潤色を加えぬものとなり、今日我々が往古の時代の細かい生活狀況やその本當の姿を溯って突き止めようとするにあたっての重要な參考文獻となっている。『越南漢文燕行文獻集成（越南所藏編）』に收められる諸書の中には、道光帝が中年にして齒が全て抜け落ちていたというような、當時の中國のエリート官僚が決して筆先に上そうとはしなかった宮中の實錄のほか、近代の著名な詩人陳三立の現存する最初期の佚詩二首のような、重要な文學・史學文獻も含まれている。李文馥が漢詩で描いた、アヘン戰爭以前、清政府がまだアモイに對して主權を行使していた時期の現地におけるうららかな光景や、黎貴惇が漢文を用いて述べた、乾隆年間、使者を送るのに付き添った欽差官の執事が、船主と結託して道すがら私鹽を賣りさばいたために、使者の船の歸路が遅延するはめになったという類の官僚腐敗のありさまもそこに見ることができる。この他、四種の使程圖は鎭南關から北京にいたる經路における各地の名所舊跡を細かく描いており、廣西・湖南の水路と關所については特に詳細である。

『越南漢文燕行文獻集成（越南所藏編）』は復旦大學文史研究院とベトナム漢喃研究院による共同事業の成果である。ベトナム漢喃研究院は叢書に收める大部分の文獻について高解像度の畫像データを提供するとともに、一部の作者の傳記史料を收集した。復旦大學の側では、文獻の眞僞の校訂・編年配列・提要の執筆と影印出版を擔當し、そのために幾度にもわたり研究者をベトナムに派遣して、關係文獻の原書との照合を行い、畫像データを檢證した。完成した『越南漢文燕行文獻集成（越南所藏編）』は、各關係文獻の具體的な作者と著作年代について多くの考證を加えた上、現在通行している各種のベトナム漢喃語（漢文・チュノム）文獻目錄における誤りを數多く訂正している。

『韓國漢文燕行文獻選編』計三十册

復旦大學文史研究院と韓國成均館大學東アジア學術院の協力により、入念な共同作業のもと編纂された大型の史料文獻叢書であり、二〇一一年に復旦大學出版社から刊行された。これは二〇一〇年に文史研究院とベトナム漢喃研究院が共同で編纂・出版した『越南漢文燕行文獻集成（越南所藏編）』の後を繼ぐ、周邊國家が所藏する漢文文獻の整理と出版というプロジェクトの、もう一つの重要な成果である。

中國と政治・文化の上で深い關係を持った緊密な隣國として、李氏朝鮮（一三九二―一九一〇）は、明・清二代五百年あまりの期間に、千回以上にわたって中國に使節を派遣しており、その中でおびただしい量に及ぶ豐かな内容をもった燕行文獻を生み出した。朝鮮燕行使が中國社會の各分野について殘した細緻な觀察と詳細で正確な描寫は、中國社會とその變遷について數多くの一次資料と新鮮な異域の視點を提供するのみならず、明・清時代の東アジア史を生き生きと描いた一幅の繪卷物を、我々の前に開いて見せてくれる。

しかしながら、これらの貴重な燕行文獻は、韓國では出版されていたものの、そのほとんどが韓國國内にあったために、中國の學者にとっては調査・利用するのに極めて不便であった。また韓國が整理・影印した各種の燕行文獻叢書には、少なからぬ問題點や缺點があった。そのため、あらためて中國認識に關して重要な價値を持つ燕行文獻を愼重に選び、嚴格に鑑別し紹介を加えた上、中國で出版すると、中國における關係領域の學術研究の必要性がにわかに高まることとなった。復旦大學文史研究院と韓國成均館大學東アジア學術院が共同編集した『韓國漢文燕行文獻選編』は、韓國の各主要研究機構の藏書から三十三種の燕行文獻を精選したものである。時間的には五百年近くにわたり、明清交代・三藩の亂・乾嘉の隆盛期・近代の激變期など重要な歴史上の轉換期を含んでおり、一五世紀から一九世紀にかけての中國ひいては東アジアの歴史的變遷を研究するにあたっての貴重な一次資料である。

二　「周邊から中國を見る」に關係する、連續性をもった會議

二〇〇七年一二月、成立間もない復旦大學文史研究院は、シンガポール國立大學中文系・日本の關西大學文化交渉學教育研究據點・香港城市大學中國文化中心と共同で、「周邊から中國を見る」國際學術討論會を開催した。會議では「天下・世界と中國」「西方からの觀察」「ベトナムから中國を見る」「日本の中國認識」「朝鮮から中國を見る」「アジア：中國と日本」「日本と中國：史料と視點」「言語翻譯と文化接觸」「雙方の觀察する立場」などの主題に分かれて、イタリア・アメリカ・カナダ・オーストラリア・日本・韓國・ベトナムと大陸中國・香港・臺灣の學者たちが三十餘篇の論文を寄稿した。その内容は日本・朝鮮・ベトナム・ヨーロッパの中國に關する記錄について、また異文化間におけるお互いの想像上のイメージと目にした時の印象についてであり、更に言語接觸と文化交渉の方法論をも含んでいる。これは廣義の文化交渉、すなわち異文化間の相互接觸の歴史であると言えるとともに、何よりまた各文化における自己認識の歴史であると言える。この會議で發表された論

文は、『從周邊看中國（周邊から中國を見る）』論文集にまとめられ、「復旦文史專刊」の第一種として、既に二〇〇九年に中華書局から出版されている。

續いて二〇〇九年六月には、復旦大學文史研究院と東京大學東洋文化研究所が共同で、「世界史の中の東アジア海域世界：三つの百年（一二五〇―一三五〇、一五〇〇―一六〇〇、一七〇〇―一八〇〇）を中心に」國際學術討論會を擧行した。この會議にはアメリカ・日本・中國から參加者があり、會議では、アナール學派の歴史家フェルナン・ブローデル（Fernand Braudel, 1902–1985）の「地中海とフェリペ二世時代の地中海世界」が論じた一六世紀の地中海のような歴史空間を新たに探し求めることが試みられた。それは、海路での交通を紐帶とし、環東シナ海周邊をお互いにつながりをもったネットワークとしてとらえ、新たに一つの「歴史世界」を構築するということである。會議の中で、日本の研究者は、フランスのアナール學派の影響を受け、岡元司氏が環境を論じ、吉尾寛氏が季節風・海流・航路を論じ、中島樂章氏・向正樹氏が貿易を論じ、藤田明良氏が居住・移民・產業について論じた。中國側はそれと異なり、張翔氏・陳波氏が論じたのは、東アジアの文化と政治であり、朱莉麗氏の論文では諸國間の相互認識に言及し、王振忠氏の論文では社會と風俗が論じられた。會議で見られたこの微妙な差異の中に、中日兩國の學術界の異なる趨勢を見て取ることができるかもしれない。この會議の論文集もまた「復旦文史專刊」の第四種として、二〇一一年の年末に中華書局より出版された。

十二月、復旦大學文史研究院はまたオランダのライデン大學東アジア研究センター（MEARC）・東京大學國際哲學研究センター（UTCP）と共同して、「民族のアイデンティティと歴史意識・近現代の日本と中國の歴史學と現代性（モダニティ）について檢討する」國際學術研究討論會を開催した。この時の會議には、アメリカ・ドイツ・オランダ・日本・ベルギー・オーストリア・カナダと大陸中國・臺灣から二十名餘りの研究者が參加し、「現代性と哲學：國境を越えた思考」「日本と中國の現代における知識轉換」「現代性と歴史」「現代性と國家：境界線の描き直し」等々の問題をめぐって討論が進められた。會議では一九世紀末から二〇世紀初めにかけての、日本と中國の思想界の現代世界と歴史に對する認識や、日本と中國の現代文化と科學の轉換、西洋の學術が日本と中國に與えた影響、明治以來の日本の中國に對する新しい歴史認識などが論じられた。

二〇一〇年、復旦大學文史研究院は相次いで二度にわたり關連する學術會議を開催した。五月に、復旦大學文史研究院は「西洋語文獻中の中國」學術討論會を開催した。アメリカ・ドイツ・スペイン及び大陸中國・臺灣・アモイから學者たちが參加し、三つの主題についていくつかの議論を行った。第一は「中國研究における西洋語文獻の意義」（夏伯嘉・董少新・Henning Kloter・戚印平）である。これは西洋語文獻の研究方法論に關する議論であり、西洋語文獻の價値と、どのようにそれらの域外文獻を利用するか、また文獻の分布と應用についての說明に重點が置かれた。第二は「西洋語文獻中の中國に關するイメージの變化」の議論であり（李毓中・毛傳慧・蔡香玉）、大航海時代のスペイン・フランス・オランダ文獻の中に見られる中國の歴史と文化などが論じられた。第三は「西洋語文獻中の中國と世界市場」（張廷茂・方眞眞・Paul A. Van Dyke）で、主に中國とポルトガル、中國とフィリピンなどの國家との初期の貿易に關すること、及び世界市場の形成について論じた。

一一月には、この話題を引き繼いで、更に「初期近代世界におけるアジア：インド・中國・日本・朝鮮とヨーロッパの思想史」國際學術討論會が開かれ、アメリカのプリンストン大學（Benjamin Elman）・コロンビア大學（Sheldon Pollock・Haruo Shirane・Allison Busch）・ハーバード大學（Khaled El-Rouayheb）・日本の東京大學（羽田正）・中國の復旦大學（周振鶴・葛兆光）・臺灣の中央研究院（張谷銘）ら十一名の研究者が會議に參加し、ヒンディー語文學、日本古典、オスマン帝國の言語學習、朝鮮・中國・日本における初期のカトリックなどの話題について論じた。

以上の五回の會議において首尾一貫して主題となったのは、域外の立場・まなざし・文字記錄から、改めて中國を認識しなおすことに他ならない。

三　論著：『從周邊看中國（周邊から中國を見る）』『朝鮮燕行使與朝鮮通信使（朝鮮燕行使と朝鮮通信使）』『禮儀的交織（禮儀の織り交ぜ）』『宅茲中國（茲の中國に宅す）』等

會議の論文を基礎として、中華書局より出版された『從周邊看中國』については既に上文で取り上げた。以下に紹介するのは、上海古籍出版社から「復旦文史叢刊」として出版された、「周邊から中國を見る」の主題と關わるいくつかの著作である。そのうちの一つが、日本の著名な研究者である夫馬進著、伍躍譯の『朝鮮燕行使與朝鮮通信使』である。周知のように、夫馬進氏は京都大學東洋史の教授であるが、また復旦大學文史研究院の國際評價委員でもある。この著書は、李氏朝鮮と中國・日本との、政治・文化交流の歴史についての研究である。副題は「使節の目から見た中國・日本」とされるが、これは依據した主な資料が、朝鮮が明・清に遣わした使節とその隨行員の燕行文獻および朝鮮が日本の德川幕府に遣わした通信使團による日本の記錄であることによる。全體は十章からなり、以下の三部に分かれる。「第一部：十六七世紀燕行使の中國觀察」は、主として明清時期の朝鮮使節による中國の政治狀況に對する批判・觀察・分析について論じている。「第二部：十八九世紀の燕行使と通信使が行った學術討論と學術交流」では、主に朝鮮・日本・中國の間の學術交流・學術論爭および典籍の行き來について研究している。「第三部：燕行錄と使朝鮮錄」では、日本に現存する朝鮮燕行文獻と、明清時代に中國が琉球と朝鮮に派遣した使節の記錄を紹介している。なお、この書は韓國では既に韓國語版が出版されていたが、日本では單篇論文としてしか發表されておらず、いまだに日本語の單行本がない中で、この著作が中國において中國語で出版されたことが、中國の學術界から廣く注目を集めたことを附言しておくべきであろう。

もう一つの著作は、ベルギーの研究者、鍾鳴旦（Nicolas Standaert）著・張佳譯の『禮儀的交織』（The Interweaving of Rituals）である。鍾鳴旦氏はベルギーのルーヴェン大學の教授であり、また復旦大學文史研究院國際評價委員でもある。この書の副題は「明末清初の中國・ヨーロッパ文化交流の中の喪葬禮」であり、その主な內容は一七世紀の喪葬の儀禮が、中國と歐州の文化交流の中で演じた役柄についてである。死と關わる喪葬の儀式は、古代中國の社會

生活において最も重要な禮儀制度と社會風俗であり、『儀禮』十七篇中喪葬を扱った部分が七篇にものぼることは、中國の社會秩序におけるその重要性を表している。百年前のオランダ人、高延（Jan Jacob Maria de Groot）のパイオニア的な著作、『中國宗教制度』（*The Religious System of China*）が中國の宗教制度と觀念について分析したときにも、また喪葬儀式を切り口としていた。だが一方で、ヨーロッパとキリスト教カトリックにも自らの喪葬儀式があり、それは中國の喪葬儀式とは異なったものである。ならば、ヨーロッパのカトリック宣教師が中國に入ってきた後、兩者の喪葬儀式はどのように衝突しまた妥協することになったのだろうか。鍾鳴旦氏は著書の中で、中國と西洋文化の出會いにおいてこれは注目に値する問題であると指摘している。彼は現存する中國でのカトリックに關する「初期喪葬儀式抄本」の中から新しい問題を發掘し、ヨーロッパの宣教師の文獻を通して、その時代のヨーロッパ人が中國の禮儀・風俗・觀念に對してどのように理解したのかを分析している。

「周邊から中國を見る」という課題の成果として、この五年間（二〇〇七―二〇一二）、「文史研究の新視野」をテーマとした二十餘篇の論文が『復旦學報』に續々と發表されたことについても觸れておく必要があろう。これらの論文は、中國と周邊の多くの領域・多くの問題に關するもので、たとえば江戸時代における中國書籍の日本への流傳（周振鶴「持渡書在中日書籍史上的意義（持渡書の中日書籍史上の意義）」、二〇〇七年三期）や、朝鮮・日本の漢文文獻の價値（葛兆光「攬鏡自鑑（鏡を手にして自らを映す）」、二〇〇八年二期）、ベトナムの華夷觀念（李焯然「越南史籍對〝中國〟及〝華夷〟觀念的詮釋（ベトナム史籍の「中國」及び「華夷」觀念についての解釋）」、二〇〇八年二期）、イタリアの中國についての想像と認識（史華羅「一七―一八世紀意大利人對中國的印象與想象（一七―一八世紀イタリア人の中國についての印象と想像）」、二〇〇八年三期）、朝鮮の檀君傳說と箕子傳說（孫衛國「傳說、歷史與認同（傳說・歷史・アイデンティティ）」、二〇〇八年五期）、明治日本の滿（東北地方）・蒙（モンゴル）・同（西域）・藏（チベット）・鮮（朝鮮）の學問（葛兆光「邊關何處（國境の關所はどこに？）」、二〇一〇年三期）などがある。その他に、二十餘篇の論文の中には、葛兆光・末木文美士・張隆溪・羽田正・艾爾曼（Benjamin Elman）らが、中外文化の相互認識とアイデンティティの研究の方法論について論じたものも含まれている。

最後に、最新の成果となるのが、二〇一一年三月に北京中華書局と臺灣聯經出版公司から簡體字版と繁體字版が同時出版された、私の新著『宅茲中國――重建有關〝中國〟的歷史論述（茲の中國に宅す――「中國」に關する歷史論述の再構築）』である。この著作が論じるのは、どのように歷史上の「中國」についてあらためて認識するか、どのようにアジアの異なる視點から、中國・中國の民族國家意識・エスニシティと領土・歷史上のアイデンティティなどを理解するかという問題である。本書は出版後一年たたないうちに、學術界に激しい論爭を卷き起こし、大陸の『讀書』、臺灣の『思想』、香港の『明報』及び *Journal of Cultural Interaction in East Asia* などの刊行物に、十數篇の評論が次々と發表された。その中の大多數は、「周邊から中國を見る」というこの研究の構想を強く肯定しており、この新しい研究上の考え方が、新文獻や新資料の開拓の助けとなるとともに、歷史上の中國についてあらためて理解し、ひいては中國の民族・領土・アイデンティティの問題に答える助けともなるものであると考えている。

結論：「周邊から中國を見る」という課題と學術史の變化

「周邊から中國を見る」というこの研究課題に關する研究は、復旦大學文史研究院によって進められ、中國ではすでに五年がたった。その間、次第に多くの學者たちによって指摘されてきたように、この研究課題の意義は、中國史研究の閉鎖性を改め、「中國史」「アジア史」「世界史」などの研究分野を通じ合わせ、「東洋」「西洋」「中國」の歷史と文化に本當の關連性を持たせることにより、中國研究者に「中國から飛び出して、再び中國を振り返」らせ、中國の本當の特性を理解させることにある。更に重要なことは、このテーマはこれまでの中國研究において當たり前のこととなっていた「中國―西洋／東―西」という比較方法を改め、日本・朝鮮・ベトナム・モンゴル・インドなどの視點を付け加えることで、中國を認識する立場と座標を增やし、歷史上と現在の「中國」についてより明確に理解できるようにしたということである。加えて、學術史の角度から見ると、中國の研究者が次第に向きを變えてこの「周邊」へと顏を向け、これまでに我々が十分に重視してこなかった異域の歷史資料と周邊の各種の言語とを、新しい領域と新しい研究の道具とすることができるならば、それが中國の學術にとっての「新たな成長分野」となってゆくのかも知れない。

（鈴木達明　譯）

（　）は原著の注釋、〔　〕は譯者の補足。

執筆者紹介 Ⅱ

①專門　②勤務先・職名　③主要論文・著作（最近三年）

星野　幸代　①中國近現代文學・文化　②名古屋大學准教授　③臺灣映畫表象の現在―可視と不可視のあいだ（共著　あるむ出版、二〇一〇）　日本統治下文化工作における上海バレエ・リュスと小牧正英―『大陸新報』報道を追って（『JunCture 超域的日本文化研究 02』、二〇一一）『侯孝賢の詩學と映畫のプリズム』（共著　あるむ出版、二〇一一）

フレデリック　ジラール Frédéric Girard　①日本佛教史　日本思想史　②フランス極東學院（Ecole Française d'Exrême-Orient）教授　③Aisthêsis, A Journal of Culture and Aesthetics, A Special Edition April 2011, Waseda University Tôkyô, «Collèges jésuites dans le Japon des XVIe et XVIIe siècles», Cahiers de l'Institut du Proche-Orient du Collège de France, I, Librairie d'Amérique et d'Orient, Jean Maisonneuve, Paris, 2009 «The trinomial substance (*ti* 體), signs (*xiang* 相) and activity (*yong* 用) in some Dunhuan manuscripts related to the Dilun school and the *Treatise on the act of faith in the Great Vehicle*, University Geumgang, Korea, Kokusho kankôkai, Tôkyô, 2010